巻頭言

Preface: On our 60th Anniversary

岸井隆幸 [1]
Takayuki KISHII

本誌後述のご案内の通り、一般財団法人 計量計画研究所 The Institute of Behavioral Sciences（以下IBS）・東京事務所は、今年7月1日より、JR水道橋駅近くの「東京都文京区後楽1丁目4番14号　後楽森ビル12階」に移転して活動を開始した。これまで拠点としていた新宿区市谷本村町の事務所には、38年間お世話になった。その前は創設場所でもある代々木の事務所で22年間を過ごしている。ただ、時の流れは速く、現在所属の職員で代々木の事務所を知っている者は2、3名に過ぎない。

創立以来、代々木で22年、市谷で38年と書けばお分かりのとおり、実は今年はIBS設立60周年、還暦を迎える節目の年である。そこで今年の本稿は、IBSの歴史を振り返るところから始めたい。

IBS：60 年の歩み

IBSは1964年7月15日、行政管理庁（現総務省）認可の財団法人（所員14名）として設立された。基本財産は当初1,000万円、翌年5,000万に増額され、日立製作所が4,000万円、日本ビジネスコンサルタント（NBC：1959年設立の企業で、現（株）日立システムズにつながる組織）が1,000万円を出捐している。その後、1981年に基本財産が1億円に増額されている。

そもそもは、当時開発が進んでいた大型計算機を社会に活用することを目的として設立されたもので、当初の寄付行為には「我が国及び諸外国の政治、経済、社会事象の数量的な調査研究を行い、わが国諸官庁をはじめ諸企業の合理的政策決定並びに科学的計画に関する知識普及に資することを目的とする」（第2条）と記されている。実際、設立時には行動科学・統計数理・交通・経済・システム・防衛科学といった6研究室（その後、都市計画、言語情報、環境・資源の研究室等が創設）があり、1964年度（設立初年度）の研究としては、外務省から「自動索引の研究」、「各国現勢と世界現勢の数量化に関する研究」等4件、防衛庁から「自衛隊員の募集可能数の予測モデルに関する研究」等2件、建設省から「高速道路への転換率に関する研究」等3件、日本道路公団および首都高速道路公団から「関門トンネルの交通量推定及び設備投資の経済試算」等4件を受託している。

初代理事長は早稲田大学政経学部河辺旨教授（交通経済学）、理事には文部省統計数理研究所林知己夫教授（社会調査サンプリング方法の確立・数量化理論の開発等で知られる統計学者）・同石田正次教授（数理統計学者）・東京大学経済学部大石泰彦教授（近代経済学者）・同教養学部京極純一助教授（政治学者）・同宇宙航空研究所穂坂衛教授（日本のCG・CAD分野のパイオニア）・港湾審議会計画部会長鮫島茂氏（内務省を経て（株）日本港湾コンサルタント創設）・明治大学工学部後藤以紀教授（東大教授・工業技術院院長なども務めた電子工学者）・北川宗助氏（NBC代表取締役）といった錚々たるメンバーが並んでいた。

このように大型コンピューターの開発を背景に多分野にわたる研究の歩みを始めたIBSであるが、その後の急激なモータリゼーション、PT調査・物流調査の普及などもあって徐々に都市交通分野の業務がその中心となり、1989年には総務省および建設省の共管団体となった。また、当初は日立のHIPACやHITACを主たるコンピューターシステムとして活用していたが、1976年からは富士通のFACOMを導入するなど、日立との関係は徐々に薄れて、今では特定のコンピューターメーカーと繋がっているわけではない。

1974年には、解析部（当時）の電子計算機室を大型汎用計算機の有効活用を図るシステム会社として独立さ

1 一般財団法人計量計画研究所　代表理事　博士（工学）

せ、その後しばらくはIBS関係者が同社の社長・会長を務めていた。同社は当初、IBSデータセンター（IDC）と称していたが、1991年（株）ライテック（Linkage of Intelligence & TEChnology）に名称変更、その後も引き続きIBSとは強力なパートナーシップ関係を維持している。

加えて、1972年から1976年にかけて仙台都市圏のPT調査を業務として進めた後、1981年1月、仙台に東北事務所を開設することとなった。その後仙台市内で2度ほど移転をしたが、東北事務所自体、既に40年以上の歴史を有している。

初代河辺理事長の後任として、日立製作所のコンピューター技師長を務めた高田昇平が1970年に第2代理事長となる。その後、谷藤正三（内務省・建設省を経て日本大学教授、セントラルコンサルタント（株）代表取締役）、佐々木恒一（初代IBS専務理事、元日本道路公団調査室長）、井上孝（東京大学名誉教授）、並木昭夫（元建設省都市局技術参事官、日本橋梁（株）会長）、黒川洸（筑波大学名誉教授、東京工業大学名誉教授）と続いて、2017年秋からは筆者が代表理事を務めている。

こうしたIBSの60年の歴史の中で最も長く理事長（代表理事）を務められたのは黒川洸先生で、中央省庁再編があった2001年6月に就任され、2017年秋まで17年間有余IBSの運営をリードされた。黒川理事長が就任されて5年後には公益法人改革の嵐が吹き荒れ、2011年4月、IBSも非営利型の一般財団法人計量計画研究所（基本財産1億円）として新たなスタート（内閣府による設立認可）を切ることになり、今日に至っている。

7代目黒川理事長に次いで長く務められたのは5代目の井上孝先生（1984年から1997年まで13年間）であり、井上理事長の時代の1986年9月に、代々木から市谷に事務所を移している。

このお二人の在任期間を合わせると30年、つまりIBSの歴史の半分となるが、井上先生、黒川先生はともに日本都市計画学会の会長を務められていた「わが国の都市計画・交通計画の分野を牽引されてきた研究者・実践者」であり、自ずと今日のIBSの業務範囲もこうした分野を中心とすることとなっていった。

IBS：現状及び次に向かって

現在IBSには約100名の職員がおり、ざっくり言えば総務部・研究本部・東北事務所に分かれる。

東京事務所にある研究本部は、都市地域・環境部門、交通・社会経済部門、データサイエンス室が中心であるが、これまでの市谷の事務所ではそれぞれ異なるフロアにあった。新しいオフィスではワンフロアとなったことで、より一体感が増すものと思われる。またIBSはこれまで大学の研究室の延長線上のような自由な働き方が特徴であったが、最近ではさらに多様な働き方を目指して、海外での限定勤務、大学への派遣勤務なども組織として認めることとした。ちなみに現在、博士号を持つ職員は19名、その多くはIBSに就職してから業務を通じて学位を取得している。

経営面では、公益法人改革の際に随意契約が問題視されたこともあって大きな試練を迎えたが、その後の職員の努力で業績はほぼ回復した。加えて公益法人制度の改正13年を経て「公益目的支出計画」（新公益法人制度において公益目的に利用することを義務付けられた資金支出計画）も予定より早く達成、2023年会計年度末（2024年7月31日）で終了を迎えることとなった。

もちろん、60年という社会の変化を受けて、我々が主たる業務対象としてきた都市計画・交通計画のテーマも自ずと変化を遂げてきている。経済の高度成長期は、幹線道路の将来交通量予測そのものが大きな課題であり、他の国々の事例などを学びながら大規模な調査、交通量推計を各地で展開してきた。一方、高度成長の負の側面として顕在化した公害問題を受けて自動車の大気汚染問題にどう対処するか、といった課題が浮かび上がってきたし、市民参加の計画プロセスが重視されるようになってPI（パブリックインボルブメント）やMM（モビリティマネジメント）や社会実験などの分野も業務対象となってきた。さらに政権交代を経験してプロジェクトの費用対効果分析も重要視されるようになった。

近年は我が国全体の人口減少を受けて、単純な将来自動車交通量予測だけではなく、利用者に寄り添った、質をより重視した交通解析や歩行者のための空間を重視した地区交通計画、あるいは自動運転を視野に入れたデー

タオリエンテッドな交通政策も求められるようになっている。

しかも公民連携の政策展開が進んで、問題事象に対してより複合的な解決策が求められるようになった。特に大都市圏域では都市再生の動きが活発で、各地で民間提案のまちづくりが進められようとしており、公共空間と民有地空間の協調やマネジメントの在り方が重視されるようになってきた。一方、地方部では人口減少・高齢化といった状況を受けて立地適正化計画や地域の足である公共交通をどのように維持するかといった話題が重要になってきている。また地方分権を背景に、国土計画・大都市圏計画といった広域的政策の存在感に陰りが見られ、複数の地域間の連携をどう実現するか、広域的な役割分担を視野に入れた行政・民間企業・市民の協調をどのように実現するのか、といった課題も残されている。

このように課題が多様化・複雑化するにつれて、業務の進め方として他の様々な組織と連携して取り組む事例が増えてきているが、IBSとしては、強みである「これまで培ってきたPT調査や物流調査のノウハウとデータの蓄積」や「国の政策立案のお手伝いをして身につけた大局観」を最大限に活かして、「経年的あるいは地域をまたいだ比較分析」・「データに基づいた質に関する定量的分析と予測」・「広域的視点を持った政策提言」、そして「実効性のある施策プログラムの立案」などにより積極的に取り組んでいきたいと考えている。

まだまだやらなければならない課題が山積している中での、新しいスタートである。

心新たに

今回一大作業であった引越しは、総務やシステム系、情報員の方々などの努力により、なんとか乗り切ることができた。そして今、IBSの活動は東京都下水道局ポンプ場の上に立つビルの12階で展開されている。19階建ての12階は「中層階」と言えなくもないが、超高層が許される前の建築規制100尺は超えているからやはり「高い場所にある」わけで、市谷事務所とは違う風景を見ることができる。

北側の窓からは、小石川後楽園の静謐な緑と、迫りくるような東京ドームの白い天蓋が見える。いずれも水戸徳川家小石川屋敷の跡地にできたものであるが、実は明治から昭和初期にかけては東京砲兵工廠がこの緑の庭園を取り囲むように広がっていた。今のIBSオフィスの場所もその一部であった。

南側の窓からは神田川と日本橋川、そして水辺を覆い隠すように走る首都高速道路と鉄道が見える。江戸の大切な水脈と近代文明の交通施設がせめぎあっている風景、そしてその先には大手町や六本木、新宿の新しい超高層ビル群が立ち並んでいる。

このように、新オフィスからは「江戸から現代までの歴史を凝縮したような風景」を目にすることができる。さればこそ、「仕事をするオフィス」・「仲間と語り合う居場所」であるだけではなく、時にはブラインドを上げて目の前に広がる世界に思いを巡らせたい。

人は環境によって大きな影響を受けるが、同時に人々の営みが環境を創造する。これからの我々の活動によって、研究所の内も外も環境が変わっていく。新しいオフィス内の風景も変化するし、オフィスから見える外の風景もやがて変化する。

次の時代の新しい景色をここで見てみたい。否、次の時代の風景を、我々の営みによって創り上げたい。

「新しい視座」の前に広がる「TOKYOの風景」は、そういう気持ちを呼び起こす。

新たな60年に向かって、研究所（Institute）は「常に社会の一歩先を歩む」という志を掲げ、総身の知恵を振り絞ってVISIONおよびその実現までのPROCESSを描き、自ら汗を流して導流路を掘って大きな潮流を導き、次の世代に引き継ぐべき社会の実現（for Better Society）に深く貢献していきたい。

60周年とオフィス移転と公益目的支出計画の終了をよい機会ととらえ、新しい働き方を模索しつつ、心新たに動き出した「次のIBS」（IBS NEXT STAGE）に、ご期待を頂きたい。

巻頭雑話：引越しの余禄

巻頭言の頁を利用させて頂く形で申し訳ないが、今回の引越しで思わぬ余禄があったので報告したい。

私事で恐縮だが、この度の引越しにあたってこれまで抱え込んできた様々な書類・書籍を思い切って処分することとした。積み上げてあった山をひっくり返してみると、思いがけないものが見つかる。どこを写したかもわからない古い写真はもちろん、大学時代のノート類、外国の記念コインまで出てきた。

その中に、色あせたB5版の紙ファイルで綴じられた10ページほどのコピーがあった。誰から、どこでもらったかも定かではないが、建設省勤務時代に先輩から読んでおけと言われて渡されたような気がする。

コピーのタイトルは「ザ・役人」。

タイトルの脇に（61.4 AE）と記されているので、バブル期前後に書かれたものと思われるが、著者は不明。内容から推察するに、おそらくは郵政省（当時）の役人によるものと思われる。「役人の仕事に対する心構え」を10ほどの短いフレーズにまとめ、その内容を解説する形となっている。

全てをご紹介するほどの紙面はないし適切でもないのだが、最初の部分を簡単にピックアップすると、

・最初のフレーズは「VISIONを描け」。

VISIONは判断の物差し。5年・10年・20年先の日本を描き、そのVISIONに梯子をかけろ、と説いている。

・2番目は「価値を選択しろ」。

価値を選択して理論を構築せよ、ただどの価値を選択しても実現までのプロセスは変わらない、という。

・3番目は「理論構成は原点から」。

「先輩の言葉を鵜呑みにするな」から始まり、降りるのは3秒でできるのだから「簡単に降りるな」。

また、結果としての「成功」に対して「まだ課題は残る」とか、「失敗」に対して「だからすでに指摘していたように」といった「評論家でいるのはやめろ」、ともいう。

勝手ながら、上記の3フレーズ以外で、何となく気になった言葉をとりあげると、

「脳みそに汗をかけ」・「人の徳・人間性・人柄で仕事の成否が決まる」、

「電話で用を足すな（飛んでいけ）」、

「いやなことは率先して、楽しいことは人の後に」・「know how からknow who へ」、などなど。

中には今読むと「なんだこれ」と思う言葉もあるが、当時の役人（国家公務員）の心意気は十分に感じとることができる。このところ、若い方々の国家公務員離れの話題が紙面をにぎわすが、「国を動かす」場面に近い立ち位置にいることの意味を、今一度考えさせられるメモであった。

そして、国を動かすのはもちろん国家公務員だけではない。社会に向き合うIBSとしても、こうした言葉に耳を傾け、心して仕事に取り組むべきところはあるように思う。

この「ザ・役人」、締めくくりは

「菊作り

菊見るときは

陰の人」（吉川英治）　であった。